

医学の現場から

胆道がん 血管走り難手術の肝門部 腹部超音波検査で早期発見を

胆道がんは肝臓でつくられた消化液の胆汁が通る胆管と胆のうにできるがんの総称。図のように、胆管は肝臓の中では何本にも枝分かれしているが、次第に合流して肝門部という所で左右の胆管が合流、一本の管(総胆管)となり十二指腸につながっている。

胆のうは、総胆管についている袋状の小さな器官で、胆汁を一時ため、食事をすると胆のうが収縮。胆汁を十二指腸に排出し、消化を助ける。

胆道がんの中でも、特に肝門部胆管がんや、がんが肝門部に広がった胆のうがんの手術は難しく、限られた病院でしか行っていない。世界一の実績を誇る名古屋大医学部の二村雄次教授に、胆道がんの医療事情を聞いた。

【症状】胆管にがんができると胆管はしだいに細くなり、やがて詰まってしまう。胆管が詰まると、胆汁の色素成分のビリルビンが増加、黄疸(おうだん)や白色便、紅茶色の尿などが現れる。黄疸が出るまでは特にこれといった症状がないのが普通。

胆のうがんも初期のころはほとんど無症状で、黄疸、体重減少、食欲不振などの症状が出るのは、かなり進行してから。胆のうに石を伴っていることも多く、右上腹部の痛み、発熱、嘔吐(おうと)など胆石による胆のう炎の症状で見つかることも少なくない。

【手術】早期の胆のうがんは胆のうと、周囲のリンパ節を取るだけでよく、手術後の経過も極めて良好。肝臓や十二指腸に広がっているがんの場合は、肝臓の部分切除や肝臓(すい)十二指腸切除も行われる。がんが肝門部に広がっているときは難しい肝右葉切除と肝外胆管切除が必要。

胆管は、その周囲に重要な血管が走っているため、がんの場所や広がりによって手術法が違ふ。肝門部胆管がんは一センチ場所が違っても手術方法が違ふなど、消化器がんの中でも最も難しい手術。手術時間は通常で十二時間前後、十五時間以上になることも少なくない、という。

* * *

【実績】二村教授らは約二十五年前から肝門部胆管がんを中心とした胆道がんの手術に取り組み、これまでに二百七十例を超える世界一の実績を持っている。

イタリア、オランダ、ドイツの外科学会などから招かれて、この手術手技を現地で実施。インターネットで実績を知り、名大病院で手術を受ける外国人も出てきている。

昨年四月下旬には、トルコの男性(70)が来日。黄疸がひどく手術まで二カ月かかり、十五時間を超える難しい手術だったが、無事に回復し、六月下旬、帰国した。

名古屋大学に続いて世界的に多いのは、アーサン医科大(韓国ソウル市)、ハーバー大(ドイツ)、ジョンズ・ホプキンス大(米)など。アーサン医大のリー教授は二村教授の指導を受け帰国した。

国内では慶応大、国立がんセンター、東大、千葉大、横浜市立大、信州大、三重大などで治療している。

二村教授は「胆管がんは女性より男性に若干多い。胆のうがんは女性が男性の約二倍で、胆のうに石のある六十歳以上は要注意。早期発見に手軽で効果のあるのは腹部超音波検査。中年以上の人は年に一度は受けるのが望ましい」と話している。
(編集委員・五十川仁達)